

29 MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS HILLWIND

繊細優美な秋の草花は、古の仏画や絵巻、料紙などにしばしば登場します。雄壮な美を好んだとされる桃山時代にさえ、秋草を用いた蒔絵が誕生しました。姿形の美しさはもちろん、時の流れを強く感じさせる秋草は、古来愛され続け、情趣的傾向の強い日本の美術を象徴するともいわれています。いずれにせよ、流れゆく時間を愛おしみ、心動かされることの多いこの季節、美術鑑賞には最適といえそうです。(Mm)



4



3



2



1

2011年 11/8|火| - 2012年 1/22|日|

イケムラレイコ うつりゆくもの

2011年3月11日、ベルリン。展覧会の打合せを行っていた私たちのもとに飛び込んできたのは、東日本で大地震が発生したというニュースでした。日本との通信は乱れ、情報は錯綜したまま：このようなときに展覧会が出来るのか、いやこのようなときだからこそやり逃げたいのだとイケムラレイコ氏と何度も話し合う中で、「うつりゆくもの」という展覧会タイトルが生まれました。

暗闇を横切るひとすじの光。そこに横たわる少女。イケムラレイコの作品として最もよく知られているのが、「横たわる少女」の像ではないでしょうか (Fig.1)。風をはらんだスカートは蝶が羽をひろげていくさまを思わせ、少女がまるで羽化をむかえるサナギのように姿を変容させていく様子が連想されます。

少女の像は彫刻においてもつくられています。その多くは頭部が欠如していたり、体の内側が空洞になっています (Fig.3)。目や口を手で覆う姿は、見ている私たちの意識を身体の内側へと誘い込み、うつろな部分を際立たせます。「うつわ」という言葉にも派生する「うつ(空、虚、全)」は、イケムラの作品におけるキーワードといえるかもしれません。

半ば目覚め半ば眠っているさまを「うつうつ」などと言いますが、眠る顔は近年のイケムラの作品にしばしば表されるモチーフです (Fig.4,5)。眠りと覚醒、生と死、意識と無意識といった境界線上の行き来。また、目を閉じたときにまぶたの裏に映る残像、あるいは眠りに落ちているときに見る夢のよう

なおぼろげな空間を描いた風景画も制作されています (Fig.2)。「うつりゆくもの」とは、イケムラの作品モチーフのただだけをあらわすものではありません。日本、スペイン、スイス、ドイツと生活と制作の場を移してきたこと。絵画・彫刻・ドローイングなど幅広い素材と技法で常に新たな表現を模索してきたこと。イケムラレイコという作家が何よりもまず「うつりゆくもの」であるのです。

さて、三重での展覧会タイトルには「ただいま」という候補が挙がっていたことも特別に記しておきましょう。イケムラの出身地である津市において開催される初めての大規模個展です。様々なうつりゆきの中でも変わることのない根源的な何ものか。イケムラが探求し続けるものが、この展覧会を通して立ち現れてくることでしょう。(Hm)



5

1. 《黒に舞う》1998-99年
豊田市美術館蔵 撮影：林達雄
2. 《グリーンスケープ》2010年
Photo: Jörg von Bruchhausen
3. 《ひざまずいて(目に身をあずけながら)》1997年
Photo: Jochen Littkemann
4. 《青に浮かぶ顔》2006年
Courtesy: Galerie Haas & Fuchs, Berlin
Photo: Jörg von Bruchhausen
5. 《白い眠り》2010年
Photo: Sasa Fuis

飲む、打つ、買う。イケムラさんが大好きなことだ。

もちろんここでの「買う」は、モノを買うことという意味で使っている。一緒に買い物にいったことがあるわけでないのだけれども、二〇〇八年に「エモーショナル・ドローイング」と題したグループ展に出品してもらったときにこんなことがあった：京都会場のオーピングの日のことである。集合時間になってもイケムラさんが来ない。開始まであと三〇分となってもまだ来ない。さすがに心配になって電話をしたら、なぜか河原町のデパートにいた。なにか急遽必要になったものでもあるのだろうかと思つて尋ねてみると、靴を選んでいるとのこと。なんでも今住んでいるドイツには、小さいサイズで素敵な靴がないのだそうだ。なるほどそれはそうかもしれないと思ひながら、至急タクシーに乗ってもらよう強くお願いした。ちなみに今回東京展での展示作業中にイケムラさんが履いていた、穴のたくさんあいたショートブーツは確かに素敵だった。どこで買ったか聞いてみたものの、残念ながら答えを覚えていない。少なくとも日本ではなかった。どんな靴であるか興味ある人は、ぜひ展覧会特設サイト「イケムラレイコ Side B」の「プロセス」を訪れてみてください。イケムラさんのファッションを確認できます（左頁にも出ています）。

さて、次は「飲む」について。イケムラさんは誰かと食事をすることが、そしてそういう時にいろんな話をするのが好きなように、それゆえに、大事なことは、いわゆるミーティングの時間

よりも、むしろ食事の席で決まる（あるいは思いつく）ことが少なくないようだ。実際今回の展覧会の準備の時もそういうことがあった。メモはとりづらいが、すぐに乾杯できるのがよかった。

最後に、「打つ」。イケムラさんの人生自体がギャンブルだ。彼女が好きな文学者のひとりに、実存主義を代表する思想家サルトルがいて、その思想を象徴する言葉に、アンガジュマン（engagement）というのがある。日本語では、「約束」「契約」「社会問題へのコミットメント」「とりあえず決断すること」（内田樹）などと訳されるが、そこに含まれている「engage」という名詞は「担当」「保証」を意味し、それが「engage」と動詞化すると「担保を入れて保証すること」となる。そして「engage」と再帰動詞化したときには、「（担当を入れて）約束する」、つまりは「賭ける」という意味になる。この言葉が示すように、実存主義においては、自らの生を、あるいは未来を、自らの責任において決めること、言い換えれば運命をいったん未来に（あるいは歴史に）預けて自ら道を切りひらいていくことが大事なわけだ。

そんな実存主義の影響を強く受けた日本の文学者のひとりに大江健三郎がいて（彼の著作のひとつに、イケムラさんは挿絵を寄せたこともある）、初期の代表作に『見る前に跳べ』という作品があるが、イケムラさんは一九七二年、まさに跳んだ。海を越えて、ヨーロッパへと飛んでいった。時代はいわゆるニクソン・ショックの直後、一ドルが三六〇円から三〇八円に切り下げられたとは

いえ、まだ外貨の持ち出し制限があった頃である。しかも行き先はフランコによる独裁政権下のスペイン。よほどのギャンブラーでも、なかなかこんな真似はできない。しかもイケムラさんがすごいのは、すでにある程度の「配当」を得たのではないかと少なくとも外野からは思ってしまう今においてもなお、「賭け」をし続けているところである。たとえば、目下ベルリンでは新しいアトリエ兼住居が建設中であるが、どうやらこれは決してこれまでの「成功」の結果、象徴ではなくて、これからの挑戦の布石のようなのである。そこからどんな新作が生まれてくるのか、今回展示されている驚きの新作「山水」が今後どのように展開するのか、非常に楽しみである。

東京での展示作業の様子（2011年8月）（撮影：木奥恵三／提供：東京国立近代美術館）

東京国立近代美術館での展示風景（撮影：木奥恵三／提供：東京国立近代美術館）

（東京国立近代美術館研究員）



小出愼重《パリ・ソンムラールの窓》1922年

画家宮崎進は自身の詩画集『旅芸人の手帖』のなかで「人生の漂流によって私が私になる。／そこには私という突き放った人間への、私自身の旅がある。／発見や出会いを求め、私以外の何ものもない／私自身になりたいからである。」と詠っています。

異国へ向かう目的は人それぞれですが、見聞を広めるためや楽しさをもとめるためだけでなく、この画家の詩のように自分がいったい何者であるかを確認するためであったり、自分の可能性を見つけるためであったりします。さらには、避けられない事情によって異国の地を踏む場合もあります。

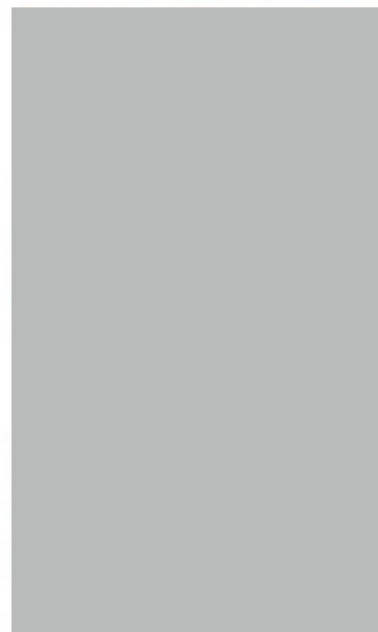
そうした異国の地には、私たちに特別な感覚を与える何かがあります。人種も違えば、風土や文化も違う地に立てば、誰もが気持ちの高ぶりを感じます。ときには自分だけがエトランジェー(異邦人)であることを過剰に意識し、周りからの視線を鋭敏に感じ取ったりすることもあります。

たとえば日本人画家が多く目指した1920年代のパリの地。到着して間もない画家小出愼重は、街の光景を気に入りながらも「ただキョトキョトとして、町の見物と、語の不通と、

勝手のわからぬのと、やゝこしい混雑とで、何も手につかずウロウロとして」しまったと手紙に綴っています。しかし、一方で高村光太郎の詩にあるように、「パリは珍しくもないような顔をして／人類のどんな種属をもうけ入れる。」雰囲気があり、緊張感だけでなく解放感が得られる地であったようです。パリに限らずそうした異国から、表現者としての画家たちは、いったい何を吸収し、何を感じたのでしょうか。今回の展覧会は、ヨーロッパやアメリカ、アジアなど、画家たちが異国の地で描いた作品、異国への憧憬を示す作品を三重県立美術館のコレクションで構成・紹介します。(Ty)



ビゴー《日本素描集(クロッキ・ジャポネ)》より 1886年

藤田嗣治《ラマと四人の人物》1933年
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇談会など、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

■年会費

一般会員：3,000円 入会金：500円
ベア会員：5,000円 入会金：1,000円

■特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額、美術館に関する情報提供のほか、レストラン、ミュージアムショップのご利用にも割引があります。詳細は、三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館協力会 賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布、鑑賞団体への援助など、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。協力会の主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

■会費

年間一口
個人：25,000円 法人：50,000円
準会員：10,000円

■特典

展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会毎のカタログ贈呈や美術館活動に関する情報提供などの特典があります。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

展覧会スケジュール

■企画展示

イケムラレイコ うつりゆくもの

2011年11月8日[火]ー2012年1月22日[日]

観覧料：一般 900(700)円

高大生 700(500)円

小中生 400(300)円

()内は前売りおよび20名以上の団体料金

●アーティストトーク

(松本透・東京国立近代美術館副館長との対談)

日時：11月12日[土] 午後2時から(1時間程度)

場所：美術館講堂 ※申込不要・参加無料

●ギャラリートーク

日時：11月19日[土]、12月10日[土]、1月14日[土]

いずれも午後2時から(1時間程度)

※参加ご希望の方は、企画展入口にお集まりください。

展覧会観覧券が必要です。

エトランジェー異国への眼差し展

2012年2月4日[土]ー3月25日[日]

観覧料：一般 500(400)円

高大生 400(300)円

小中生無料

()内は20名以上の団体料金

■常設展示

美術館のコレクション

【第Ⅲ期】2011年9月27日[火]ー12月25日[日]

追悼展示 元永定正

【第Ⅳ期】2011年12月27日[火]ー2012年3月31日[土]

柳原義達記念館 柳原義達の芸術

【第Ⅲ期】2011年9月27日[火]ー12月25日[日]

【第Ⅳ期】2011年12月27日[火]ー2012年3月31日[土]

■メールマガジン 購読料無料

三重県立美術館の最新情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

利用のご案内

■開館時間

午前9時30分ー午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

月曜日(祝日休日にあたる場合は開館、翌日閉館)[2012年1月10日[火]]/年末年始(2011年12月29日[木]から2012年1月3日[火]まで)

■観覧料

【常設展示の場合】

〈美術館のコレクション+柳原義達記念館〉

一般 300(240)円

高大生 200(160)円

65歳以上の方、小・中生 無料 ()内は20人以上の団体料金

【企画展示の場合】

その都度定めます。

ただし、学校の教育活動として小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、身体障害者手帳をお持ちの方および付き添いの方1名が観覧する場合は無料。

■交通

津駅(近鉄・JR線)西口より徒歩約10分または、循環津駅西口(つつじが丘、むつみが丘経由)行き、総合文化センター行き2分、美術館前下車 ※できる限り公共交通機関をご利用ください。



三重県立美術館 〒514-0007 津市大谷町11

Tel: 059-227-2100 Fax: 059-223-0570 <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

三重県立美術館ニュース「HILL WIND」No.29

■発行日：2011年11月8日[禁・無断転載] ■企画・編集・発行：三重県立美術館

■原稿末尾のイニシャルについては以下のとおり：田中善明(Ty) 田辺美貴(Mm) 原舞子(Hm) ■デザイン：豊永政史

■表紙の作品：イケムラレイコ《夜の近辺》2002-03年 三重県立美術館蔵

